02

A craftsman who preserves British tradition and passes it on to future generations
-Shoes made by graduate Yohei Iwasaki-

英国の伝統を守り未来に伝えるクラフトマン
～卒業生岩崎陽平さんがつくる靴～

戸矢崎満雄 | TOYAZAKI Mitsuo | 芸術工学部アート・クラフト学科 教授

1

2年ほど前、車で自宅を出て大学に向かうところで、自転車で坂を登る男性から声をかけられた。卒業生と語る本人の学生時代の顔は直ぐに思い出せた。岩崎陽平くんが、工業デザイン学科ファッションデザインコースに2000年に入学し、初めからシューズデザインを希望していたことは覚えている。その後に、専門学校を出てロンドンに渡り、伝統店で職人をしているということも耳にしていた。後で調べると、彼の卒業研究のテーマは『ぬくもりのあるハンドメイドシューズ』[注1]だった。

驚いたのは、私の住まいの数百メートルたらずのところにアトリエを構え、靴づくりをしているということだった。日を改め、アトリエを見学させてもらった。再び驚いたのは、その建物は本学教員[注2]が設計に関わり建てたものだ。そのことは、彼が日本に戻りアトリエを構える際に、本学を訪れ良い物件がないか相談したことによるものらしい。彼が本当にふさわしい作業場を得たことは、全くの偶然ではない巡り合わせと言えるだろう。

2

仕事場を訪ねると、まさに制作中の靴や道具がいっぱいで目を奪われた。話を聞くうちに、不思議に思っていたことがいくつか理解できた。2012年から7年間住んだロンドンを出て日本の神戸に家族で帰ったのは、ビザの関係と家族のことなどを考えての決断ということだ。また、つくる靴はロンドンの店から依頼があり、完成品を空輸しているらしく、制作には1年間を要するとのことだった。私はその辺の事情も知らないので、まるで雲を掴むような話だと思った。少し現実離れした話と、確かに目の前にいるクラフトマンとしての彼を知るためには、私自身が彼に靴を作ってもらう必要があると考えた。というよりも、自分用の注文靴をこの機会に是非に欲しいと思った。

２年前では、まだ日本での注文は私が初めてだったようだ。何もかもが驚きだが、完成は１年後ということだった。私の足を測定して木型をつくり、仮靴（トライフィッティング用）を制作したあと、それは惜しげもなく

注1：神戸芸術工科大学HP卒業選抜集アーカイブ『2004神戸芸術工科大学＝卒展〈学部・大学院/選抜集〉』
注2：環境デザイン学科の川北健雄教授、花田佳明名誉教授らがディレクションを行い、設計組織アルキメラが設計した、建築と駐車場の一体化プロジェクト。
1：クラフトマンの岩崎陽平さんと仕事机
2：神戸市須磨区にある岩崎さんのアトリエ内部

切り刻まれてしまう。仮靴でも十分な仕上がりだった。もちろん、形や色はお任せでなく、全て自分の好みを問われた。イニシャルのMとTを靴先に空気穴のデザインとして入れてもらう。大学の卒業式に、私は待ち望み完成した本物の靴を履いて、学生たちに自慢して見せた。

近頃は円安なので、彼にとっては少し得なこともある。しかし、イギリスから依頼される靴をつくり、空輸する仕事を一人続けることは並みのことではない。英国と日本とでは文化が違う。だが、仕事が遅いと謙遜する彼の仕事が丁寧なのは日本人の特質だろう。日本でもそうだが、英国でも伝統を守り未来につなぐ技術者が年々希少になって行くだろう。日本の着物文化と同じように、技術が衰えて行くのも仕方がない。しかし、伝統を守り続けて行く限り、その価値はますます高くなるばかりだろう。

岩崎陽平プロフィール：

1981年　京都府に生まれる

2004年　神戸芸術工科大学工業デザイン学科ファションデザインコース卒業

2006年　エスペランサ靴学院卒業、R.U.入社（神戸市、靴工房2011年退社）

2012年　ロンドンのG.J.CLEVERLEY & CO. LTDの靴職人（後に社員）となる（～2019年）

2020年　神戸市須磨区にビスポークシューメーカーとしてアトリエを構える

3

4

3：注文靴の仮合わせで足とのフィッティング作業
4：岩崎さん制作の筆者注文靴の完成品